

北斗市に住む卒業生の立林冷子さんから 作家・三浦綾子さんについて お手紙をいただきました!!

『氷点』『塩狩峠』などで有名な小説家・三浦綾子さんについて、若かりし頃のご夫婦の様子が北海道新聞に毎週土曜日に連載されています。三浦さんは旭川出身で、私が高校時代に旭川にいたので教会を通して、三浦ご夫妻とも面識がありました。**遺愛にもご夫婦で約50年前に講演でいらしています。**その当時遺愛高校2年生だった立林さんは、三浦さんの講演をしっかりとおぼえていて、最近『心の筆筒（たんす）』という題でエッセイを書き、そのエッセイを手紙に同封してくれました。立林さんの了承をえて、『心の筆筒』を全文掲載します。

2022年6月17日

『心の筆筒（たんす）』

心の筆筒をもっていますか？

もっていたならどんなものが仕舞われていますか？

今年は、作家・三浦綾子さん生誕百年で、改めて数々の作品・そして三浦綾子さんご夫妻の生き方に関心が高まっています。三浦綾子さんは私が尊敬する、大好きな作家です。

私の通っていた高校はプロテスタントの女子高校でした。今から50年前、高校2年生の時、三浦綾子さんご夫妻をお招きし函館市市民会館において講演会がありました。壇上に起立したご夫妻の凛とした姿勢は、昨日のことのよう目に浮かびます。三浦綾子さんは、初めに「私の隣に立っているのは若く見えますが “ツバメ” ではなく夫です。」と、ご主人・光世さんを紹介され会場は大爆笑でした。そして、ご自身の生い立ち、病との長い闘い、キリスト教との出会い、ご主人とのめぐり逢いについて語られ、「氷点」・「塩狩峠」・「道ありき」など作品についても解説してくださり、飾らずありのままでお話しして下さっているのが伝わってきました。祈りをこめて、時には笑いも誘う、あっという間の1時間。

最後は、「お嫁に行く時は、ありがとう と ごめんなさい と

という言葉を中心に、沢山詰めて行って下さい、あとは何もありませんので」というお言葉で、締めくくられました。

講演を聞いた当時、私は17歳。その日から67歳の今日まで、私の心の筆筒には、ありがとう と ごめんなさい の言葉が敷き詰められています。感謝とお詫びの心です。

一方50年の間には違和感を抱くことがしばしばありました。それはビジネス電話から「あれいどうぞございました、申し訳ございません」の二言が聞こえてこないのです。心の中から、感謝とお詫びがすっぽり抜けているのでしょうか。経済の発展と効率化を追い求め、大切なものを置き去りにして来た時代の産物としか思えません。置き去りにしたものは、なんとしてでも取り戻さなければと思います。

ありがとう と ごめんなさい の二言が心の筆筒から素直に言えたなら、世界に平和が戻り笑顔と幸せが訪れるはず。

心の筆筒の言葉はどんなに使ってもなくなることはありません。心の中で次々と生まれてくるのですから。

三浦綾子さんのお言葉は、色褪せず、重さも価値も不変のまま、生涯にわたり私の心の筆筒の中で生き続けます。

天国の三浦綾子さん、光世さん、生きる道標をありがとうございました。

心の筆筒に隙間がありましたなら、ありがとう と ごめんなさい を敷き詰めて、日々惜しむことなく使いたいものです。



三浦光世・綾子ご夫妻

立林 冷子
(遺愛女子高等学校昭和49年卒業)